

誌上
博物館
15

「主将像は日展特選作品」

誰が見慣れていても、その由来を尋ねられると皆一様に首を傾げてしまうものがある。

秩父宮ラグビー場正面の観覧席入口の階段を上がったところに立っている、ヘッドギアを付けラグビーボールを手にした選手の彫像もそれだろう。台座の周囲を覗き込んで手がかかりとなるような説明は何もない。

これと全く同じ銅像が、群馬県太田市の三洋電機ワイルドナイツの練習グラウンドにも立っていることをご存知だろうか。こちらには台座に作品名『闘魂』、側面には作者、富永直樹の名前がある。

1989年10月27日、政府は、この年の文化勲章受章者5人と文化功労者を発表した。日本画の片岡球子、電子工学の西沢潤一らとともに文化勲章を受章したのが、多年にわたって男性像を中心とした秀作を発表してきたわが国彫刻界の重鎮、富永直樹（本名=良雄）だった。

富永は、1913年長崎生まれ。戦前東京美術学校（現東京芸術大）彫刻科に学び、同郷の北村西望教授に師事、在学中『F子の首』で文展に初入選した。

1950年の第六回から三年連続して日展（日本美術展覧会）特選となったが、第八回に出品したのが秩父宮の正面に置かれている高さ195センチの大作『主将』像である。

富永は最初の年に『殊勲者』、二年目に『山』で受賞するが、前者について、『日展史』17巻は、「果敢敏捷さを窺わせるラグビーの颯爽たる像。今終わったばかりの試合の花形であり殊勲を称えるモニュメントであろう。ユニフォームの下から未だおさまらぬ息遣いも聞こえるよう」と評している。また翌年の作品も、ザイルを肩にピッケルを手に山に挑む登山者の精悍な像で、裸婦像ばかりが目立つ当時の日展第三科「彫塑」部門で富永の作品は異彩を放っていた。三年

目の『主将』像については、「かなり技術達者にすぎているが、しかしまだ対象への感動を失っていない」と作品の評価が微妙に変化する。第九回の日展では、審査員に加えられ、左ストレートを放つボクサーを題材にした『闘魂』を出品した。

1957年7月に開催された「スポーツ芸術展」に小品「ラインアウト」を発表した際に協会の機関誌に制作の感想を寄せている。

「もっと胸を張って力一杯投げる動作を思い、ラグビー関係の方に会うたびに、こんな投げ方はないのか、と聞くのですが、ラグビーでは（そんな）投げ方はしないといわれ、そのたびに製作の出鼻をくじかれてきた」



旧クラブハウス前にあった像

富永作
ラインアウト像

秩父宮ラグビー場は、何度も改修が行われているが、では『主将』像は、いつから置かれるようになったのだろうか。月刊国立競技場（1998年4月号）で富永自身が、経緯を語っている。

（ラグビーマンを題材にした理由）

「以前からラグビーというスポーツが好きだった。スポーツマンらしい健康美と理知、精神力に富んだ男性を表現したものです」

（秩父宮に展示されることになった経緯）

「1954年にフィリピンのマニラで開催された第二回アジア大会の芸術作品展に出品して幸運にも賞を受賞することができました。そこで私の手もとにあるよりも当時第三回アジア大会（注1958年5月〜）の主催会場として建設予定だった国立競技場にあったほうがいだろうと思い文部省に寄贈しました。その後1964年の東京オリンピックの後、秩父宮ラグビー場に移設されたと聞いています」

しばらくは、旧クラブハウス前にたたずんでいた像は、現在のメインスタンドの改修とともに今の場所に収まった。

もう一つ未解決の問題が残っている。なぜ三洋電機のグラウンドに同じものがあるのだろうか。

1991年1月8日、秩父宮ラグビー場の全国社会人決勝で三洋電機は、悲願の初優勝をかけて神戸製鋼と対戦する。そう、後半ロスタイム神鋼ウィリアムスの奇跡の60メートル快走によるトライで、三洋が16対18と逆転された、あの試合がきっかけだった。

この試合を観戦していた富永が、三洋電機日本一への想いを込めて、あの主将像と同型のブロンズ像に『闘魂』とプレートをつけて寄贈、日本一獲得の暁には、『覇者』のプレートに付け替えられることになっているという。

『主将』像が発表された1952年。「三洋電機30年の歩み」によると、同社は、国内初のプラスチック製ラジオSS-52を発表、同時にデザイン部門の強化をはかるため顧問に富永を迎えた。さらに、1961年2月に工業意匠部が設けられ、富永は要請を受け、顧問から部長に就任する。秩父宮の悲劇の一戦当時、常務取締役になっていた。1976年初頭、「世界のサンヨー」を目指して現在も使われている三洋電機の新しいトレードマーク（地球や世界を表現する円に、上に向かう三本の線が入り、SANYOの文字が続く）が発表された。このデザインを担当したのが、誰であろう富永だった。

Photos & Text by Yoichi Akiyama